



文化活動の光明く防疫セットとエンコーダーと舞台への思い

「友恵しづねと白桃房」アートマネジメント
株式会社 オフィス友恵 代表取締役社長・舞踏家

加賀谷早苗

ただいま、海外からの帰国者は一律14日間自宅待機ゆえ、台湾からこの程帰国したばかりの私は待機中の身です。避ることを避けずかか日程のこと…。

2020年3月27日〜5月17日の間、台湾の国立伝統藝術センター

主催により台湾戯曲センターにて、2020台湾伝統戯曲藝術フェスティバルが開催予定でした。

「友恵しづねと白桃房」の舞踏による共作、人と幽霊の恋愛物語「朱文走鬼」がプログラムされて

4月4日、5日、台湾の南管オペラ（中国に発祥し800年の歴史を有する）の伝統劇団「江芝翠劇

場（Gang-gai-tsu-i heater）」と日本の私ども「友恵しづねと白桃房」の舞踏に

おり、この劇場公演に向けて、3



月改竄の頃、COVID-19の二

ユースを日々眺みながら奔走しておりました。

台湾では感染症に対する各人の自衛意識も強く、「我々はマスクと消毒液を

用意し万全の体制で安全にお迎えします」との

台湾側からの連絡を受け、3月13日訪台。

まず初めに受けとったのが写真の防疫セットで

す。日本では入手難だった消毒液、マスク、体温計等が一式充当されました。また、稽古場や劇場への入場前には体温測定と消毒を行う体制が守られ、日毎に観客席の間隔が広がる等、新ルールが出

現。滞在1週間を経た頃、ついに、台湾政府の文化部は、文化活動において防疫優先を決定。センターは当フェスティバルの全演目を中止が延期とする旨、どちらを選択するかは個別に交渉との局面となりました。

もう走り始めている真つ只中、公演中止にせよ、延期にせよ、既に人力も出費も生じている現実。

しかし、何が大事か。本誌を読まれる方は様々なイベントを抱え、苦渋に晒されている方も多いこと

と思います。中止という選択肢も検討されました。その上で、「無観客」でも、上演したい。ライブストリーミング配信で届けたい」これが、台湾側の劇団の決断でした。

本作「朱文走鬼」は2006年に台北国立実験劇場で初演され、第5回台新芸術賞、ハフォーミングアーツ部門大賞を受賞、2010

年パリでの「FESTIVAL DE LIMAGNAN」に招聘され国立オペラ・ド・バス

チーユで上演されて以来、台湾では14年の時を経ての再演に向かっています。

幸い、他用でアメリカから来ていたストリーミング会社・Receiver Group LLCの力を得て配信が叶いました。高画質、高性能のストリーミング配信は、通常、両手で抱える程のエンコーダー（ビデオカメラとパソコンの間を繋ぐ配信ツール）を用いているのですが、ハイオリティを保ちながら、手の平に乗る程のサイズに開発されたものを持参されており、その恩恵に与りました。

防疫セットとこの小さなエンコーダー、そして舞台への思いが劇場公演、文化活動の光明となった一事例でございます。

台湾の皆様の方全な防護体制のもと、無事に公演を終焉し、帰宅の途に。

最後の贈り物は、マスクでした

4月14日 空港検疫での検査結果に「一息ついた日」。